

日本教育方法学会

第48回大会プログラム

前日 10月5日(金)	13:50	公開授業・研究協議受付
	14:15	公開授業・研究協議 (福井大学教育地域科学部附属中学校)
	17:30	
	18:00	
	18:30	理 事 会 受 付
	20:00	全 国 理 事 会 (ユアーズホテル福井)

第 一 日 10月6日(土)	8:30	受 付 開 始								
	9:15	課題研究Ⅰ 教職スタンダードの設定と教員養成教育の充実 —「教職実践演習」の実践に向けて—				課題研究Ⅱ 授業における発達障害児の指導 —教科指導の課題を問う—				
	11:15									
	11:20									
	12:10	総 会								
	13:00	休 憩								
		自由 研究 1	自由 研究 2	自由 研究 3	自由 研究 4	自由 研究 5	自由 研究 6	自由 研究 7	自由 研究 8	自由 研究 9
	15:40									
	15:50	公 開 シ ン ポ ジ ウ ム 教育実践研究の持続可能性を問う								
	18:20									
	18:30									
20:00	会 員 懇 親 会									

第 二 日 10月7日(日)	8:30	受 付 開 始								
	9:00	自由 研究 10	自由 研究 11	自由 研究 12	自由 研究 13	自由 研究 14	自由 研究 15	自由 研究 16	自由 研究 17	自由 研究 18
	12:10	休 憩								
	13:15	課題研究Ⅲ 学級における学びと集団 —その今日的課題—				課題研究Ⅳ 教育方法学の学問的固有性とは何か —教育方法学において「理論」とは何か—				
	15:15									
	15:30									
		ラウンド テーブル ①	ラウンド テーブル ②	ラウンド テーブル ③	ラウンド テーブル ④	ラウンド テーブル ⑤	ラウンド テーブル ⑥	ワーク ショップ ①		
	17:00									

2012年10月6日(土)・10月7日(日)
於 福井大学(文京キャンパス)

大会参加要領

1. 会場案内：会場は、福井大学(文京キャンパス)です。会場への経路につきましては、次頁をご参照ください。

2. 受付：両日ともに8：30からとなります。

受付は総合研究棟V（教育系1号館）1階で行います。

- ・大会参加費（『大会発表要旨』代を含む）は、一般会員4,000円、学生会員3,000円です。
- ・当日会員（臨時会員）もこれに準じて受け付けております。
- ・本年度までの学会費（一般会員8,000円、学生会員6,000円）を未納の方は、あわせてお納めください。
- ・本年度の学会費を納入された方には、受付にて『教育方法41』をお渡しします。
- ・会員懇親会の参加受付も行いますので、ふるってご参加ください。会費は4,000円となっております。詳しくは、15頁の「インフォメーション」をごらんください。
- ・受付にてネームプレートを用意しておりますので、お名前をお書きのうえ、おつけください。

3. 昼食：両日とも、生協食堂が営業しておりませんので、受付にて弁当の販売を受け付ける予定です。

4. 研究発表：発表会場につきましては、4・5頁の「会場配置図」をご覧ください。

- ・自由研究の発表時間は、以下の通りです。

個人研究：発表20分 質疑10分

共同研究：発表30分 質疑10分

（但し、口頭発表者が1名の場合は、個人研究に準じます。）

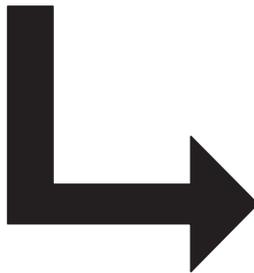
- ・自由研究における共同研究発表者の氏名にある○印は口頭発表者を表しています。

※大会に関するお問い合わせは、3日前の10月3日までに学会事務局（TEL/FAX：082-424-6744）にお願いいたします。

〈福井大学(文京キャンパス)案内図〉



文京キャンパス
 教育地域科学部・工学部
 〒910-8507
 福井県福井市文京3丁目9番1号



〈交通手段のご案内〉

福井まで

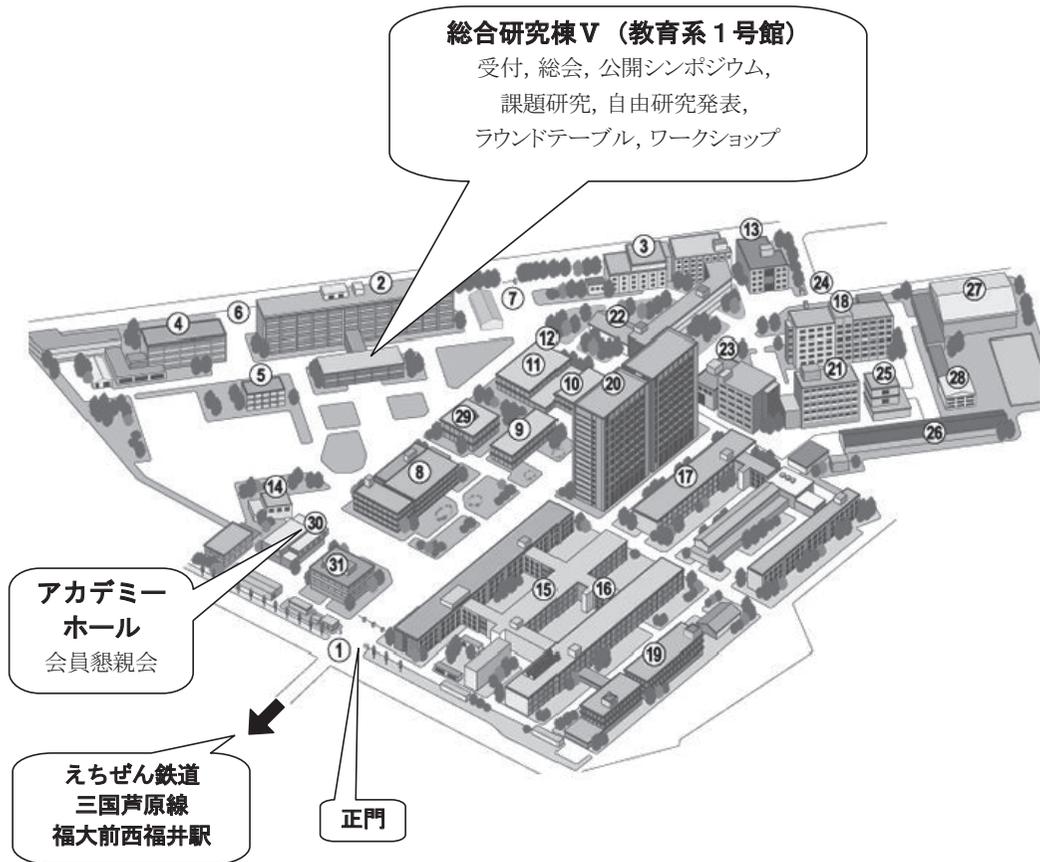
- ・東京-福井／約3時間30分 (JR 利用)
- ・東京(羽田)-小松／約1時間 (空路利用)
- ・小松-福井駅／約1時間10分 (空港連絡バス利用)
- ・名古屋-福井／約1時間40分 (JR 利用)
- ・大阪-福井／約1時間50分 (JR 利用)

福井大学 文京キャンパス (教育地域科学部・工学部)

- ・えちぜん鉄道 三国芦原線／福井駅-福大前西福井駅下車 (所要時間 約10分)
- ・京福バス／JR 福井駅前(10のりば)-福井大学前下車 (所要時間 約10分)
- ・北陸自動車道／福井 IC. 又は福井北 IC. から (所要時間約30分)

〈会場配置図〉

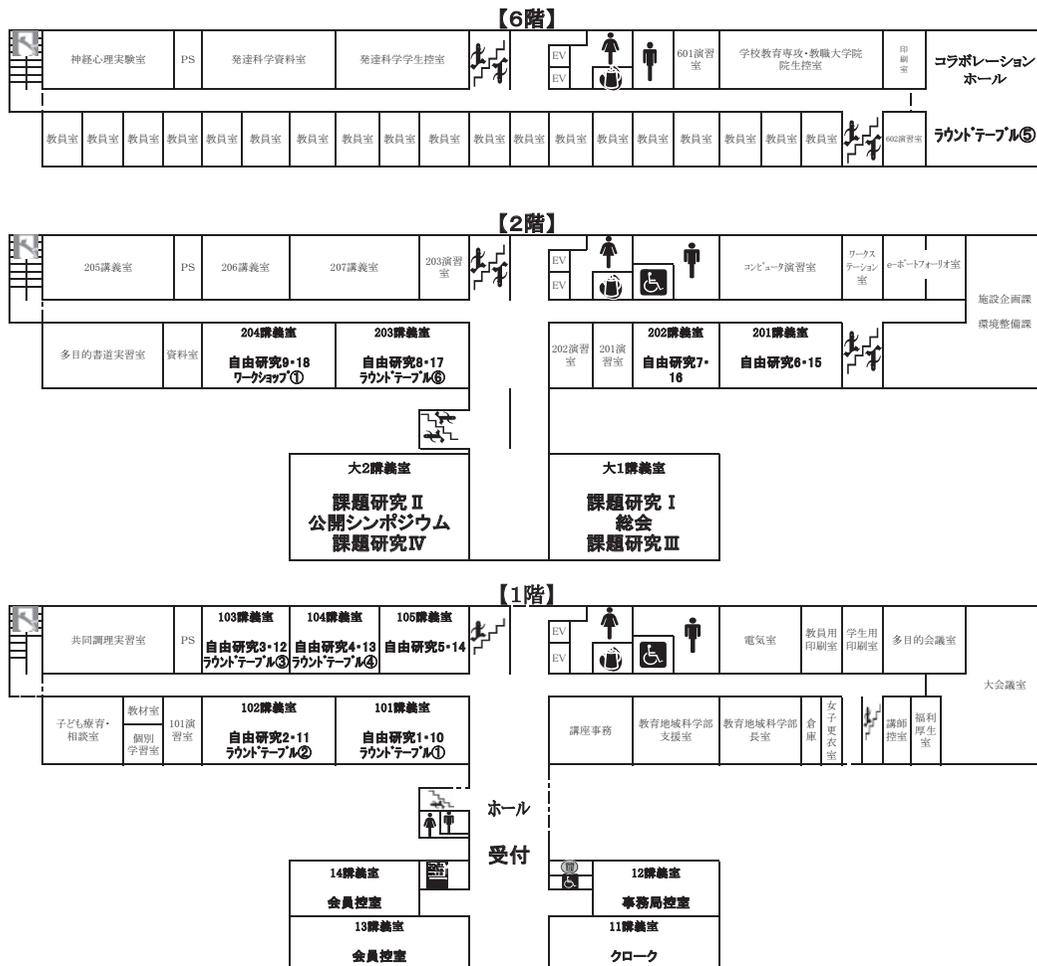
福井大学 文京キャンパス（教育地域科学部・工学部）マップ



- | | |
|-----------------------|-----------------------------|
| 1. 正門 | 17. 総合研究棟Ⅳ（工学系2号館） |
| 2. 総合研究棟Ⅴ（教育系1号館） | 18. 総合研究棟Ⅶ（工学系3号館） |
| 3. 共用講義棟 | 19. 総合研究棟Ⅷ（工学系4号館） |
| 4. 総合研究棟Ⅵ（教育系3号館）／音楽棟 | 20. 総合研究棟Ⅰ |
| 5. 教育実践総合センター | 21. 総合研究棟Ⅱ（遠赤外領域開発研究センター） |
| 6. 北門 | 22. アドミッションセンター／留学生センター／入試課 |
| 7. 通用門 | 23. 産学官連携本部 |
| 8. 総合図書館 | 24. 東門 |
| 9. 大学会館／就職支援室 | 25. 超低温物性実験施設 |
| 10. 厚生会館／学生食堂・売店・書店 | 26. 先端科学技術育成センター |
| 11. 学生支援センター | 27. 第1体育館／プール |
| 12. 掲示板 | 28. 第2体育館 |
| 13. 課外活動共用棟 | 29. 総合情報基盤センター |
| 14. 保健管理センター | 30. アカデミーホール |
| 15. 総合研究棟Ⅲ（工学系1号館） | 31. 事務棟 |
| 16. 工学部売店 | |

〈教室配置図〉

総合研究棟V（教育系1号館）



会場配置

受付：総合研究棟V（教育系1号館）1階

総会：大1講義室

公開シンポジウム：大2講義室

課題研究Ⅰ：大1講義室

課題研究Ⅱ：大2講義室

課題研究Ⅲ：大1講義室

課題研究Ⅳ：大2講義室

自由研究1・10：101講義室

自由研究2・11：102講義室

自由研究3・12：103講義室

自由研究4・13：104講義室

自由研究5・14：105講義室

自由研究6・15：201講義室

自由研究7・16：202講義室

自由研究8・17：203講義室

自由研究9・18：204講義室

ラウンドテーブル①：101講義室

ラウンドテーブル②：102講義室

ラウンドテーブル③：103講義室

ラウンドテーブル④：104講義室

ラウンドテーブル⑤：コラボレーションホール

ラウンドテーブル⑥：203講義室

ワークショップ①：204講義室

会員控室：13講義室・14講義室

事務局：12講義室

※会員懇親会の会場は、アカデミーホールです。

10月5日(金) 公開授業・研究協議

福井大学教育地域科学部附属中学校

- 大会前日に、福井大学教育地域科学部附属中学校において、公開授業及び研究協議を行います。参加は無料、受入人数は30名となっております。ご参加をお待ち申し上げます。
- 資料の用意等の関係から、9月28日(金)までに、学会事務局 (hohojimu@riise.hiroshima-u.ac.jp)へお申し込みください。その際、研究協議への参加の有無もお知らせください。
- プログラム 大会前日10月5日(金)

10月5日(金)	13:50~	受付 会場：福井大学教育地域科学部附属中学校（教生控室前）
	14:15~14:45	オリエンテーション
	14:55~15:45	公開授業
	16:00~17:30	研究協議（合同）

■ 附属中学校へのアクセス

住 所 〒910-0015 福井市二の宮4-45-1

T E L 0776-22-6985

F A X 0776-22-6703

ホームページ <http://www.f-edu.u-fukui.ac.jp/~fuzoku-j/>

来校の際は、福井駅前から発車するバスか、えちぜん鉄道三国線にご乗車ください。

○京福バス

10番のりば

20-幾久新田塚線

25-川東三国線

26-福井病院藤島線

27-大学病院新田塚線

28-運転センター線

(新田塚バス停下車 徒歩3分)

○えちぜん鉄道三国線

八ツ島駅下車 徒歩5分



※さらに詳しい情報につきましては、随時、学会ホームページ上でお知らせいたしますので、そちらを御確認下さい。

10月6日(土) 9:15~11:15

課題研究 I

教職スタンダードの設定と教員養成教育の充実
—「教職実践演習」の実施に向けて—

(大1講義室)

コーディネーター・司会者

井ノ口 淳 三 (追手門学院大学)

山崎 準 二 (東洋大学)

提案者

佐久間 亜 紀 (大東文化大学) 教員養成改革の動向と課題

—「教職実践演習」が提起する問いとは—

遠藤 貴 広 (福井大学) 教員養成スタンダードと教職実践演習をどう利用したか

—協働の多様化と重層化による省察的探究の拡大と深化—

三橋 謙一郎 (徳島文理大学) 「教職実践演習」の実践と教職課程の充実

—私立大学の開放制教員養成の立場から—

〈設定趣旨〉

教職をめざす学生の身につけるべき資質・能力、到達目標・評価基準を記述した教職スタンダードを設定することが、教員養成教育の重要な課題となっている。教職スタンダードの開発と実践は、「教職実践演習」の本格的実施が迫る中で、教員養成教育に携わるすべての大学の関心事になっている。

昨年度の大会では、①教職スタンダードの研究動向と課題、②教職スタンダードの作成動向における情意の扱いについて、③教職スタンダードにもとづく教員養成教育の充実の取り組み、について国際的な動向や具体的な取り組みに基づいた報告がなされ、議論が交わされた。その成果を踏まえ、本年度は「教職実践演習」の本格的実施に焦点をあて、教員養成教育をいっそう充実していく上で何が求められているのか、具体的な研究課題と取り組みの方向性について議論を深めたい。

10月6日(土) 9:15~11:15

課題研究Ⅱ

授業における発達障害児の指導

— 教科指導の課題を問う —

(大2講義室)

コーディネーター・司会者

新井英靖(茨城大学)

湯浅恭正(大阪市立大学)

提案者

長谷川 順一(香川大学) 算数・数学科における授業の課題を問う

原田 大介(福岡女学院大学) インクルーシブな国語科授業を考える

— 自閉症スペクトラム障害の学習者の事例から —

宮本 郷子(大阪府内小学校) 授業における発達障害児の指導

— 主として国語教育の課題を問う —

〈設定趣旨〉

2007年の特別支援教育制度の開始以降、通常の学級における発達障害児への対応が学校教育の重要な課題として取り上げられてきた。学級集団への「同化」と学級からの「排除」の論理を越えて、発達障害児の居場所づくりとインクルーシブな学級社会を創造する取り組みが進められ、理論的・実践的な知見が蓄積されてきた。しかし、授業過程における発達障害児の指導論の解明はまだ緒についたばかりである。授業のユニバーサルデザイン論も提起されてはいるものの、学習への特別な支援・個別指導と集団過程として展開する授業指導とを結びつける鍵は何かなど、教育方法的課題は深められてはいない。本課題研究では、発達障害児を含む学級において教科指導の授業過程をどう構想・構成するのか、その課題を問う。発達障害児の特別なニーズへの「合理的配慮」(障害者権利条約)を視野に入れつつ、国語科・算数科(数学科)における授業指導のあり方を議論する。当該教科教育の研究者からの提起と小学校教師の実践的提起をもとにして、学級を基盤にした教科指導の授業づくり・発達障害児の指導に求められる論理を考える。

自由研究1

(101講義室)

司会者 西岡 けいこ (香川大学)
諸岡 康哉 (金沢学院大学)

- 13:00 ① 音楽鑑賞での身体表現における意味生成の過程
—デューイのコミュニケーション論を視座として—
東 真理子 (大阪市立大学大学院)
- 13:30 ② 「遊び」から「学習」へと発展する授業過程における子どもの思考の変容
—ペットボトル・マラカスの音楽科授業実践を通して—
矢部 朋子 (大阪市立大学大学院)
- 14:00 ③ 授業における共感的コミュニケーションの成立要因
—音楽授業の場合—
兼平 佳枝 (椋山女学園大学)
- 14:30 ④ 探究型の音楽授業における授業構成の視点
—リズムアンサンブル学習の事例研究を通して—
衛藤 晶子 (畿央大学)
- 15:00 ⑤ 幼児の音楽的表現育成プログラムの教育的効果に関する一考察
—音楽的諸要素の認識に関する実態調査から—
佐野 美奈 (大阪樟蔭女子大学)

自由研究2

(102講義室)

司会者 安彦 忠彦 (早稲田大学)
久野 弘幸 (愛知教育大学)

- 13:00 ① 「Take One Picture」の試み
—クロスカリキュラム再考—
望月 未希 (東京学芸大学大学院)
- 13:30 ② 保育における子どもの育ちをどう捉えるか
中西 さやか (広島大学大学院)
- 14:00 ③ ドイツにおける「陶冶過程的教授学 (Bildungsgangdidaktik)」に関する一考察
—M. マイヤー (Meinert A. Meyer) の論を中心に—
樋口 裕介 (福岡教育大学)
- 14:30 ④ 「ベルリン陶冶プログラム (Berliner Bildungsprogramm)」に関する一考察
百々 康治 (至学館大学)
- 15:00 ⑤ 小中一貫教育による学校改革
—東京都北区の取組から—
○小林 祐一 (東京都北区教育委員会)
○山本 豊 (東京福祉大学)

10月6日(土) 13:00~15:40

自由研究3

(103講義室)

司会者 片上宗二(安田女子大学)
田上哲(九州大学)

- 13:00 ① 高等学校・総合社会科授業の実践と分析
—社会認識の往還の視点から—
堀田貴之(名古屋大学大学院)
- 13:30 ② 比喩表現の分析による子どもの思考過程に関する事例研究
福村美希(名古屋市立工芸高校)
- 14:00 ③ 物語文読解授業における児童の話し方に着目した読みの生成過程の検討
—D. Barnesの「探求的会話」に基づく談話とワークシートの分析—
柳智紀(新潟大学)
- 14:30 ④ 「構成活動」としてのふしづくりの論理
—小学2年生の物売り歌の実践を通して—
斉藤百合子(京都教育大学)
- 15:00 ⑤ 新しい知の様式としての想像力を育成する「構成活動」
小島律子(大阪教育大学)

自由研究4

(104講義室)

司会者 池野範男(広島大学)
三村和則(沖縄国際大学)

- 13:00 ① ドイツの政治教育における平和学習
—社会科のコンピテンシー・モデルを手がかりに—
寺田佳孝(名古屋大学大学院)
- 13:30 ② 「学力論争」を踏まえて、習熟度別指導を捉える視点
—佐藤論・加藤論を視野に入れて—
石塚祥貴(国士舘大学大学院)
- 14:00 ③ 授業構成におけるコンピテンシー志向に関する一考察
—ドイツ教授学からの示唆とその課題—
吉田成章(広島大学)
- 14:30 ④ 『意味生成の自由な学び』に期待されるもの
—アクティブラーニングとコンピテンシー—
広石英記(東京電機大学)

自由研究5

(105講義室)

司会者 金本良通(埼玉大学)
三石初雄(東京学芸大学)

- 13:00 ① 小学校算数教科書における「量の測定」の変遷
—連続的可変性の観点から—
中島淑子(名古屋大学大学院)
- 13:30 ② 方程式の授業における概念変化プロセス
—1人の生徒の学習過程に着目して—
山路茜(東京大学大学院)
- 14:00 ③ アメリカ新数学運動における発見学習の変容
—マディソンプロジェクトにおける認知発達理論の導入に着目して—
相田紘孝(東京大学大学院)
- 14:30 ④ 1930~40年代アメリカにおける批判的思考教育
—プロパガンダ研究との関わりを中心に—
樋口直宏(筑波大学)
- 15:00 ⑤ 科学的探究における体験の意味
—D. ホーキンスの Messing About 論を手がかりに—
石井恭子(福井大学)

自由研究6

(201講義室)

司会者 木原成一郎(広島大学)
宮原順寛(北海道教育大学)

- 13:00 ① 水泳運動における「水感」調査票作成の試み
○任飛銘(北海道大学大学院)
厚東芳樹(北海道大学)
- 13:30 ② 体育授業でのボールゲームにおける教育内容の再検討
—フラグフットボールを例にして—
宗野文俊(北海道大学大学院)
- 14:00 ③ 体育授業における教師の専門性に関する一考察
—熟練教師による反省的実践の表出化の試み—
深津達也(びわこ成蹊スポーツ大学)
- 14:30 ④ 授業に対する教師の省察過程に関する一考察(1)
—生徒の学びのみえ方みる教師の問いの変遷—
吉永紀子(福島大学)
- 15:00 ⑤ 実技教科における思考指導に関する研究
—体育と美術に着目して—
○民内利昭(東京大学大学院)
○遠藤信也(東京大学大学院)

自由研究7

(202講義室)

司会者 小川博久(東京学芸大学名誉教授)
佐久間亜紀(大東文化大学)

- 13:00 ① 教員養成における「異質性 (Heterogenität)」の取り扱いに関する一考察
田中紀子(広島大学大学院)
- 13:30 ② 教員養成のための事例検討システムの構築
安藤輝次(関西大学)
- 14:00 ③ コミュニケーションをはぐくむドラマの手法 その2
—教科の授業方法として—
武田富美子(立命館大学)
- 14:30 ④ 教職実践演習と保育実践力の拡充
—短期大学における模擬保育の実践と課題—
腰山豊(元・聖霊女子短期大学)
- 15:00 ⑤ 教師のエンパワーメントを実現する授業研究の条件 (4)
—「教師」を対象化した発言分析を中心に—
○藤本和久(慶應義塾大学)
大島崇(九州大学大学院)
鹿毛雅治(慶応義塾大学)

自由研究8

(203講義室)

司会者 市川博(横浜国立大学名誉教授)
大野栄三(北海道大学)

- 13:00 ① SNSを利用した一斉授業の協同化
—「一斉授業2.0」の提案—
早坂淳(長野大学)
- 13:30 ② 高大連携による学校評価支援研究
—教育アセスメントとしての活用を目指して—
新川壯光(東北大学大学院)
- 14:00 ③ 教育を成立させる力の養成を目指すインターンシップの試み
—日本大学文理学部と聖パウロ学園高等学校の取り組みから—
○土屋弥生(聖パウロ学園高等学校)
伊佐野龍司(東京都立美原高等学校)
鈴木理(日本大学)
青山清英(日本大学)
- 14:30 ④ 子ども達が家庭生活から園生活に慣れるまでの保育内容の一考察
—自然保育について検討—
寺島明子(松本短期大学)
- 15:00 ⑤ 思考・判断する社会科授業スタイルへの学生の気付き
—教材を用いるマイクロティーチングの実践から—
佐藤徹(東海大学)

10月6日(土) 13:00~15:40

自由研究9

(204講義室)

司会者 加納 幹雄 (岐阜聖徳学園大学)
長尾 彰夫 (大阪教育大学)

- 13:00 ① 米国における読みの指導のための教材集『ヴォイシズ・リーディング』の検討
山本 はるか (京都大学大学院)
- 13:30 ② 英語教育における文法教育の内容構成原理
—教育文法の質の観点から—
亘理 陽一 (静岡大学)
- 14:00 ③ 外国語活動の指導法を変えた教師の語り
—授業の姿・教師の役割・児童の学びに対する視座の変容—
粕谷 恭子 (東京学芸大学)
- 14:30 ④ パフォーマンス課題における共通性の保障と「個に応じた指導」
—京都府立園部高等学校英語科の取り組み—
○西岡 加名恵 (京都大学)
○田中 容子 (京都府立園部高等学校)

10月6日(土) 15:50~18:20

公開シンポジウム

教育実践研究の持続可能性を問う

(大2講義室)

コーディネーター・司会者

寺岡英男(福井大学)

臼井嘉一(国士舘大学)

提案者

松下佳代(京都大学) 教育実践／研究の持続可能性の条件

—大学でのアクション・リサーチを事例に—

高木展郎(横浜国立大学) 組織としての授業づくり

八田幸恵(福井大学) 実践の持続的発展を支える実践研究のあり方

—教員養成の視点から—

〈設定趣旨〉

「改革」と称して新たな教育方法が矢継ぎ早に提起される中、それが定着も発展もせず、実践者が異動した途端、破綻してしまう事例が後を絶たない。一方で、実践者が頻繁に入れ替わるにもかかわらず、その学校で培われたものが確実に継承され、長期にわたって発展を継続させている学校がある。そこで問われるのは、学校における教育実践研究の持続可能性である。

本シンポジウムでは、実践者が頻繁に入れ替わる学校の中で、異なる価値観を持った実践者同士が専門職として互いに学び続けるために何が必要となるのかを、多様な事例をもとに議論したい。

具体的には、各シンポジストが紹介する事例の中で、長期にわたってどのような教育実践研究が行われてきたのか、それはどのような実践構造によって成り立っていたのか、それを持続させるためにどのような改革が行われたのかを明らかにした上で、教育実践研究を持続させるための方法を各学校でどのように導き出していくことができるのか、また、その取り組みを実際に支える実践者の力量形成をどのように図ることができるのかといった点を、様々な視点から議論したい。

インフォメーション

●会員総会

- 日 時 : 第一日 (10月6日(土)) 11:20~12:10
会 場 : 大1 講義室
主な議題 : 会務報告
2011年度決算
2013年度予算案
次期大会校

昼食・休憩前ですが、ぜひとも多数ご参集ください。

●会員懇親会

- 日 時 : 第一日 (10月6日(土)) 18:30~20:00
会 場 : アカデミーホール
会 費 : 4,000円

会員相互の親睦をはかるため、懇親会を開きます。多数の会員のみなさまのご参加をお願いいたします。

●書籍販売について

学会事務局では、受付にて学会機関誌『教育方法』、研究紀要『教育方法学研究』、『大会発表要旨』の最新刊およびバックナンバーを、大会割引価格で販売いたします。この機会にぜひお求めください。

なお、『教育方法』最新刊(第41巻)は、本年度の学会費を納入された方には、受付の際にお渡しいたします。大会以降に学会費を納入された方には、随時お手元に郵送いたしております。

自由研究10

(101講義室)

司会者 船越 勝(和歌山大学)
三上 勝夫(北海道文教大学)

- 9:00 ① 葉聖陶の国語教育における「触発」の原理と方法
—1930年代の教育小説を中心に—
鄭 谷 心(京都大学大学院)
- 9:30 ② 多文化教育としてのアイヌ文化学習
—物語や昔話に着目して—
太 田 満(川崎市立稲田小学校)
- 10:00 ③ ドラマ手法を用いた古典授業の研究
青 木 幸 子(跡見学園高等学校女子大学)
- 10:30 ④ 論理的思考力を育てる文学の授業についての実証的研究
—言葉の意味の発達(ヴィゴツキー)との関連において—
森 川 拓 也(伊賀市立壬生野小学校)
- 11:00 ⑤ イメージ変化を目的とする文学教材の授業における論証の研究
—ヴィゴツキーの「発達の最近接領域」理論に即して—
宮 坂 義 彦(元・三重大学)
- 11:30 ⑥ 主体的学習におけるパフォーマンスと意味生成の関連性
—国語科における朗読の実践を中心として—
○小 川 博 久(東京学芸大学名誉教授)
○岩 田 遵 子(東京都市大学)

自由研究11

(102講義室)

司会者 河 原 尚 武(近畿大学)
藤 原 幸 男(琉球大学)

- 9:00 ① 挙手をためらう小学生の学級への適応
—E.ゴッフマンの概念による分析—
笹 屋 孝 允(東京大学大学院)
- 9:30 ② 教室における存在論的つながりと認識論的つながりの形成過程に関する研究
—小学3年生の国語の授業実践分析を通し—
前 原 裕 樹(兵庫教育大学大学院)
- 10:00 ③ 小学校における児童の民主的思考の成長に関する一考察
—学級活動や集団遊びを中心に—
中 塚 健 一(太成学院大学・兼任講師)
- 10:30 ④ L.コールバーグのジャスト・コミュニティにおける授業構想
—E.フェントンによる道徳教育への接近に着目して—
小 林 将 太(大阪教育大学)
- 11:00 ⑤ 授業と生活指導に関する社会記号論的アプローチ
八 木 秀 文(安田女子大学)
- 11:30 ⑥ 「荒れた」学級からの回復場面
—M.ブーバー「人間関係の存在論」によるエピソード解釈の試み—
田 端 健 人(宮城教育大学)

10月7日(日) 9:00~12:10

自由研究12

(103講義室)

司会者 庄井良信(北海道教育大学)
山崎雄介(群馬大学)

- 9:00 ① 教師の授業改善と即興的思考を支える情動の探究
—中学校教師が2学級で行う同一単元授業を事例として—
木村優(福井大学)
- 9:30 ③ 高校生に家庭学習環境の整備を促す授業の創造(1)
—そのためのハンドブックの開発と試行—
○小山将史(大阪教育大学大学院)
木原俊行(大阪教育大学)
- 10:00 ③ テスト作成過程の思考にみる中学校教師の実践的知識(2)
○細川和仁(秋田大学)
後藤真一(後藤教育研究所)
浅田匡(早稲田大学)
- 10:30 ④ 校内授業研究会における教師の専門的力量的形成を支援する校長の役割
北田佳子(埼玉大学)
- 11:00 ⑤ 授業研究を核とする学校づくり運動に関する研究
—島小記録写真と教育実践—
狩野浩二(十文字学園女子大学)
- 11:30 ⑥ 生徒の主体的な学びを実現している教師の実践知
—ナラティブとエビデンスを統合した研究アプローチの提案—
○清道亜都子(名古屋女子大学短期大学部)
○水野正朗(名古屋市立桜台高等学校)
○柴田好章(名古屋大学)

自由研究13

(104講義室)

司会者 小柳和喜雄(奈良教育大学)
木原俊行(大阪教育大学)

- 9:00 ① 消費者教育にみるメディア・リテラシー
—カナダ・ケベック州の広告教材に注目して—
上杉嘉見(東京学芸大学)
- 9:30 ② メディアリテラシーを基盤とした教育方法の再構築
—テレビ番組, PR, ゲームニクス等の手法を取り入れた授業実践開発—
藤川大祐(千葉大学)
- 10:00 ③ エンパワメントの学びとしてのメディア・リテラシー
—日本のメディア・リテラシー研究の批判的検討—
藤井玲子(立命館大学大学院)
- 10:30 ④ 現代社会における教育方法の模索
—言語活動の充実を意図した「紙と鉛筆で始める情報“学”教育」より—
安谷元伸(滋賀大学教育学部附属中学校)
- 11:00 ⑤ 「百世の安堵を図る」ための防災教育の課題
—1854年安政南海地震・2000年有珠山噴火・2011年釜石の教訓を中心に—
若菜博(室蘭工業大学)
- 11:30 ⑥ ユビキタス映像記録視聴システムを活用した教職課程履修生の授業実践能力育成支援の試みⅡ
○平山勉(名城大学)
○後藤明史(名古屋大学)
竹内英人(名城大学)

10月7日(日) 9:00~12:10

自由研究14

(105講義室)

司会者 柴田義松(東京大学名誉教授)
百々康治(至学館大学)

- 9:00 ① ドイツにおける現象学的教育学の展開
— Helmut Danner の論考を手がかりとして—
宮原順寛(北海道教育大学)
- 9:30 ② 新教育運動期における B. オットー学校の対話を基盤とする教育実践
— 幼小連携を視野に入れて—
内藤由佳子(甲南女子大学)
- 10:00 ③ フランスの新教育運動と実験学校(3)
— 異年齢教育の方法と効果—
赤星まゆみ(西九州大学)
- 10:30 ④ 『世界図絵』第3章「天空」の挿絵に関する一考察
— 1658年初版の挿絵を中心にして—
井ノ口淳三(追手門学院大学)

自由研究15

(201講義室)

司会者 阿部好策(新潟大学)
石井恭子(福井大学)

- 9:00 ① 授業研究における考察視点の検討2
櫻井真治(東京学芸大学)
- 9:30 ② 授業実践の様相— 解釈的研究
— 「発言表」による子ども個々の発言状況の検討—
田代裕一(西南学院大学)
- 10:00 ③ 先行実践の授業記録を対象とした授業研究方法の検討
三橋功一(北海道教育大学)
- 10:30 ④ 授業の文化的スクリプトに関する国際比較研究
— シンガポールにおける中学校理科の授業観の分析を中心に—
サルカールアラニ・モハメッドレザ(帝京大学)
- 11:00 ⑤ アジアにおける「日本型授業研究・校内研修モデル」の導入に関する研究(2)
— インドネシアにおける10年の授業研究の展開と新動向—
○久野弘幸(愛知教育大学)
タタン・ストラノ(インドネシア教育大学)
- 11:30 ⑥ 授業研究における解釈学
— ドイツ政治教育の授業分析を事例として—
的場正美(名古屋大学)

10月7日(日) 9:00~12:10

自由研究16

(202講義室)

司会者 豊田 ひさき (中部大学)
山根 俊喜 (鳥取大学)

- 9:00 ① 昭和前期の池袋児童の村小学校における野村芳兵衛カリキュラム論の特質
飯倉 由江 (国士舘大学大学院)
- 9:30 ② 奈良女子高等師範学校附属小学校における秋田喜三郎の「読み方教授」
—「創作的読み方授業」の創造—
神谷 キヨ子 (神戸女子大学大学院)
- 10:00 ③ 戦後初期の校内授業研究に関する一考察
—東京高等師範学校附属小学校の実践事例を中心に—
大島 崇 (九州大学大学院
日本学術振興会特別研究員)
- 10:30 ④ 1930年代の木下竹次における「修養」
齋藤 智哉 (國學院大學)
- 11:00 ⑤ 「奈良さんぽ」学習 (奈良女附小・谷岡義高教諭) にみるフィールドワーク体験学習の意義
—自律的な学習による探究の豊かさを考える—
宇佐見 香代 (埼玉大学)
- 11:30 ⑥ 橋本誠一的生活綴方実践についての一検討
—1950～60年代を中心に—
土屋 直人 (岩手大学)

自由研究17

(203講義室)

司会者 小泉 祥一 (東北大学)
西岡 加名恵 (京都大学)

- 9:00 ① 連想法を用いた授業評価
—「人間学」における看護学生概念変容—
藤井 佑介 (九州大学大学院
日本学術振興会特別研究員)
- 9:30 ② オランダにおける学校評価に関する一考察
—ダルトン・プランに焦点をあてて—
奥村 好美 (京都大学大学院
日本学術振興会特別研究員)
- 10:00 ③ 教室学習の調整における形成的フィードバックの有効性
—小学校1年生算数教室における談話の分析—
山本 佐江 (東北大学大学院)
- 10:30 ④ パフォーマンス評価におけるポスト実証主義の可能性
北川 剛司 (高田短期大学)
- 11:00 ⑤ 技術・家庭科技術分野におけるスタンダード準拠評価の効果
—題材「生活に活かすプログラミング」の事例を中心に—
○磯部 征尊 (新潟市立亀田小学校)
○水野 頌之助 (上越市立春日中学校)
○伊藤 大輔 (金沢工業大学)
- 11:30 ⑥ 教科および基礎のコア・カリキュラムにおける位置づけ
—要素表・能力表を中心に—
金馬 国晴 (横浜国立大学)

10月7日(日) 9:00~12:10

自由研究18

(204講義室)

司会者 奥平 康照 (和光学園)
子安 潤 (愛知教育大学)

- 9:00 ① 教室の「学び」における「共有」の可能性
梅田 華那 (滋賀大学大学院)
- 9:30 ② 授業における生徒間のジョイント・アテンション
古市 直樹 (東京大学大学院)
- 10:00 ③ 知的相互作用による学習の場を目指して
—振り返りの視点から—
岡田 たつみ (帝京大学)
- 10:30 ④ 集団学習における思考力向上の筋道
—ことば(外言)を鍛えるというアプローチはどこまで有効か—
大杉 稔 (滋賀県高島市立新旭北小学校)
- 11:00 ⑤ 「学び合い」生成の可能性
—「ことばの学び」の関係性を視点として—
牧戸 章 (滋賀大学)
- 11:30 ⑥ コトバの理解における四つのドグマ
—宇佐美寛の「ことばによる伝達」論を批判対象として—
小笠原 喜康 (日本大学)

10月7日(日) 13:15~15:15

課題研究Ⅲ

学級における学びと集団
— その今日的課題 —

(大1講義室)

コーディネーター・司会者

阿部 昇 (秋田大学)

久田 敏彦 (大阪教育大学)

提案者

折出 健二 (愛知教育大学) 「区別と統一」論を止揚し、新たな展開へ
— 子ども集団の学びと自治 —

川地 亜弥子 (神戸大学) 現代の生活綴方実践における学びと集団

志村 廣明 (中部大学) 学級集団のあり方を問うための理論的な検討

〈設定趣旨〉

今日、制度としての学級に根本的な変更が加えられているわけではないが、「学習集団の弾力的編成」の下で編成行為の多様性が認められ、学級が相対化される傾向がある。一方、子どもたちの「生きづらさ」とも関連して学級での授業と生活の指導に困難さが生まれている現状もある。また、そのなかで従来の学習集団論や集団づくり論の問い直しも行われ続けている。このような状況のなかで、学級教育実践のあり方があらためて問われているように思われる。

本来、学級教育論は学校論、カリキュラム論、教育的関係論、教育権論、子ども・発達論、公共性論等々の多くの論点の交差において成立するが、本課題研究では、とくに、学級とは何であったのかを踏まえて学級とは何であるべきか、学級集団および学習集団の指導はどうあるべきか、そこでの学びと集団の質を問い直すことで今後の理論的・実践的展望をどのように拓くことができるのか、に焦点を当てて議論してみたい。

10月7日(日) 13:15~15:15

課題研究Ⅳ

教育方法学の学問的固有性とは何か
— 教育方法学において「理論」とは何か —

(大2講義室)

コーディネーター

中野和光(美作大学)

的場正美(名古屋大学)

司会者

梅原利夫(和光大学)

的場正美(名古屋大学)

提案者

秋田喜代美(東京大学) 教育実践研究におけるグランドセオリーとローカルセオリー

柴田好章(名古屋大学) 授業分析による概念の発見と理論形成の可能性と課題

中野和光(美作大学) 教育方法学における理論と理論形成

〈設定趣旨〉

本課題研究では、教育方法学における理論の性格と理論形成の方法を検討することを課題とする。具体的な問いは、次のとおりである。1) 教育方法学において、理論とはどのような性格を持ったものと考えたらよいのだろうか。2) 理論形成はどのように行われるのだろうか。3) 理論は積極的な意味を持って使われる場合もあるが、理論に対する懐疑的な見方も存在する。この問題をどのように考えたらよいであろうか。

10月7日(日) 15:30~17:00

ラウンドテーブル①

教育方法のトポロジー (5)

— 教育における演劇的知・再考 —

(101講義室)

企画者

渡部 淳 (日本大学)

提案者等

深澤 広明 (広島大学)

三橋 謙一郎 (徳島文理大学)

武田 富美子 (立命館大学)

青木 幸子 (跡見学園高校)

宮原 順寛 (北海道教育大学)

渡辺 貴裕 (帝塚山大学)

宮崎 充治 (桐朋小学校)

和田 俊彦 (跡見学園高校)

中野 貴文 (熊本大学)

藤井 洋武 (日本大学)

〈設定趣旨〉

本ラウンドテーブルは、「ドラマワークによる文学作品の読解と教材開発」、「ドラマワークを活用した教師研修の可能性」、「教科学習と結びついたドラマ活動」、「談話で探るドラマ教育の可能性」に続く5回目のセッションである。

私たちはこれまで、教育における「演劇的手法の活用」について、様々な事例をもとに研究を積み重ねてきた。検討の視点としては、教材開発、教師研修、教科学習への導入、ドラマ技法習得の道筋などがあげられる。

本年度は、これまでの研究成果をふまえ、演劇的手法の活用について、より原理的な考察を加えることとし、テーマを「教育における演劇的知・再考」とした。

ラウンドテーブルの具体的手順としては、以下のように考えている。はじめに、企画者が2001年に提起した「教育における演劇的知」という概念が、その後の研究活動の中でどのように拡張・変容してきたのかを跡づけるとともに、概念の内実を「表象・分析・実践」をキーワードとして分析する視点を提起する。併せて、演劇的手法をめぐる近年の国際的研究動向も報告する。

次に、いくつかのグループに分かれ、広義的教育目標や評価と関連させながら、演劇的知の概念に様々な角度から検討を加えていく。最後に、各グループでだされた論点をもちより全体で交流することで、今後の研究の方向性を確認する。

10月7日(日) 15:30~17:00

ラウンドテーブル②

大学研究者は授業研究にどのようにかかわっているのか (3)

(102講義室)

企画者

鹿毛雅治(慶應義塾大学)

藤本和久(慶應義塾大学)

大島 崇(九州大学大学院
日本学術振興会特別研究員)

司会者

藤本和久(慶應義塾大学)

提案者

秋田喜代美(東京大学)

鹿毛雅治(慶應義塾大学)

木原俊行(大阪教育大学)

小林宏己(早稲田大学)

田上 哲(九州大学)

〈設定趣旨〉

本ラウンドテーブルは今回で3回目となり、このテーマ「大学研究者は授業研究にどのようにかかわっているのか」では最終回となる予定です。

1回目(2010年)は、大学の研究者が学校現場に対してどのようなスタンスでかかわっているのかについて語り合いました(その内容は『慶應義塾大学教職課程センター年報第20号』に収録)。2回目(2011年)は、授業観察時にわれわれ研究者はいったい何をみていて、どのように記述・記録しているのかについて、各自の‘観察メモ’・‘観察ノート’などを示しながら自己分析や相互批評をおこないました。ここまでの2回においても各研究者の専門領域や活動文脈の違いから、着眼点も解釈手法もさまざまであることが浮き彫りになり相互に刺激的でした。ただし、研究者として現場の学校の当事者たちにしっかり寄り添い、そこで起こっている事実に基づいてかかわろうとするスタンスは共通していたといえます。

今回は現場の教師たちとの直接の接点となる「事後研究協議会」の場に焦点をあてて、そこで何を考え、何に配慮し、何に触発され、何を語ろうとしているか、またその語りのモードや実際の手ごたえなどもあわせて語り合いたいと考えています。各人の経験のなかには、現場のニーズとのミスマッチに苦悩したものもあれば、共同的に何かを発見し創造するという成果に結びついた事例もあるでしょう。事後の協議会における研究者の立ち回りについては、協議会への直接参加という形態もあれば、講演・指導講評やシンポジウムといった「別枠」でのかかわりもあるでしょう。どのような形態にせよ、われわれ研究者がかかわることで(われわれ自身に学びがあることはもちろんですが)現場の教師たちにとってはどのようなリフレクションが促され、学びの場となっているのかを深く考察することにもつながることでしょう。

10月7日(日) 15:30~17:00

ラウンドテーブル③

「資質能力向上」をめぐる動向と教師の授業力量 — 教育方法学は何をすべきか —

(103講義室)

企画者

山崎雄介(群馬大学)

提案者

松下佳代(京都大学)

森脇健夫(三重大学)

村井淳志(金沢大学)

石垣雅也(近江八幡市立桐原小学校)

〈設定趣旨〉

教師の「資質能力向上」はいつの時代でも課題であり続けているが、「初任者研修」の制度化あたりからの20年ほどは、さまざまな政策が実行されてきている。しかし、一連の政策——各種研修の法制化など「形式面」の「充実」——によって順調に「資質能力向上」が行われている、という認識が教育界内外で共有されているかといえば、そうとはいえないというのが正直なところである。

そこで本ラウンドテーブルでは、教育方法学研究者の責任として、授業を中心とした「資質能力向上」を具体的に支える、教員養成・研修の「内容」を提起するために、以下の報告を準備し、参加者とともに率直な議論を交わしたい。

第1に、そもそも現在、国際的な教育政策動向において「能力」がどのように把握され、評価されているかを分析し、そうした政策動向の抱える課題を明らかにすることで、議論の前提を共有する(松下報告)。

第2に、とくに初任期の教師が現場で直面する困難とその克服の経験を現職の教師から語るとともに(石垣報告)、教師の授業観の変革、力量向上を促進する学校現場のあり方、そこへの教育方法学研究者の貢献の方途について提案する(森脇報告)。

第3に、教材研究・授業づくりを「心躍る体験」として教師に実感させるという、本来もっとも基本的でありながら、教育方法学が十分に果たしてきてこなかった役割について、大学や「免許状更新講習」での実践をふまえて提起する(村井報告)。

以上の報告をうけて、政策動向や「社会的要請」への無批判な追従でない、自律的な授業や教育実践を紡ぎ出していく教師像、そうした教師たちの養成・研修に貢献するための教育方法学研究のあり方、などについて議論を深めていきたい。

10月7日(日) 15:30~17:00

ラウンドテーブル④

社会科授業研究 何を、どのように見るのか

— 富山市立堀川小学校 柴山学級

「くらしを守る人々」の授業分析を通して—

(104講義室)

企画者

峯 明 秀 (大阪教育大学)

提案者

柴 山 秀 範 (富山市立堀川小学校)

溜 池 義 裕 (宇 都 宮 大 学)

桑 原 敏 典 (岡 山 大 学)

坂 井 誠 亮 (北 海 道 教 育 大 学)

〈設定趣旨〉

本ラウンドテーブルでは、授業改善研究に焦点をあて、以下の問題意識・手順により、授業と研究自体の積極的な公開・情報交換を行う。全国から本学会に集う研究者間や実践者との交流・連携による開かれた授業研究や授業検討会の持ち方を模索する。

○問題意識

- 1 社会科ほど多様な教科観、授業観によって語られる教科はない。本研究では、資質形成の違いによって類型化される典型的な授業を取り上げ、何を、どのように見ればよいかについて、VTRをもとに、立場を異にする研究者・実践者が意見交換する。
- 2 授業の事実は何か、各授業における内在的なPDCAの鍵要素は何かを抽出し、論理整合的な授業改善がどのようにできるかを示す。さらに、各々が拠り所とする社会科の理念や授業観を相対化し、異なる他の授業のあり方との相違を対比・吟味した上で、どのような授業改善が可能かを探る。

○手順

まず授業者からどのような目的から授業を行ったのかを述べてもらう。次に、実際の授業を参観またはVTRを視聴している提案者から、授業実践について、どのような評価が可能か、評価要素・観点を議論する。その際、学習者のどのようなパフォーマンス（記録物、作品、発言・観察、行動など）が証拠になり得るのかも合わせて提出する。

提案者からの評価のうち、対象とする授業における内在的な評価要素・観点は何か、外在的な評価要素・観点は何かを議論する。その上で、計画と実践との不一致と齟齬がどこで起こっているのか、その原因は何かを究明する。また、どのような改善が可能であるかについて、フロアーの参観者も交え、意見交換する。

10月7日(日) 15:30~17:00

ラウンドテーブル⑤

分野を超えた研究者による協働的実践研究の意義

— 教育におけるアクション・リサーチの推進のために —

(コラボレーションホール)

企画者

八田幸恵(福井大学)

提案者

石井恭子(福井大学)

遠藤貴広(福井大学)

木村優(福井大学)

笹原未来(福井大学)

杉山晋平(福井大学)

隼瀬悠里(福井大学)

〈設定趣旨〉

教育実践研究の方法として、近年、関心が高まっているのがアクション・リサーチである。アクション・リサーチは、教師が、あるいは教師と研究者が協働して、教師自身の実践や学校自体の取組の内側にある問題に関与し、その問題解決やそこに至るまでの教職専門性開発、カリキュラム開発、同僚性構築に資する実践研究の方法である。

しかし、教育におけるアクション・リサーチを実施していくことは容易なことではない。アクション・リサーチの実施にあたっては、教師の実践能力や研究者の研究推進能力が試されることになり、少なくとも以下の3点の課題が生じる。

- (1) 実践への係わり方：研究者は教師、生徒、学校と、また、教師は生徒、同僚とどのように係わることで実践の変化をより促すことができるのか
- (2) 実践の見方：授業実践や生徒の学習・成長過程をいかに見取り、それらに内在する意図や意味をどのように読み取るのか
- (3) 実践に対する変化の促し方：観て読み取った現象をいかに分析、記述し実践の改善を図っていくのか

そこで、アクション・リサーチの実施課題に鑑み、2011年5月、福井大学教職大学院のスタッフを中核として「教育におけるアクション・リサーチのための実践コミュニティ」を立ち上げた。本コミュニティでは、多教科・多学校種の学校教師をはじめとし、多種多様な専門領域を背景とする研究者が集い、それぞれのアクション・リサーチ推進にかかわる専門性開発を促進することを目的として定めた。

本ラウンドテーブルでは、まず、「教育におけるアクション・リサーチのための実践コミュニティ」の具体的な活動内容を全体報告する。次に、コミュニティ・メンバーである教育研究者にとって、実践コミュニティの活動が各自の学びにいかに関与したのかを、参会者の皆様に報告し議論する。参会者の皆様にはラウンドテーブルでの議論の中で、コミュニティの発展に資する御指導、御助言をいただけると幸いである。

10月7日(日) 15:30~17:00

ラウンドテーブル⑥

実習における準備について — 保育所と施設から考える —

(203講義室)

企画者

寺島明子(松本短期大学)

提案者

寺島明子(松本短期大学)

隣谷正範(松本短期大学)

〈設定趣旨〉

保育実習については、保育士養成校（以下、養成校）の実習指導の時限を中心としながら長い準備期間を経て実習に臨んでおり、実習準備を行うことは不可欠といえる。その過程の中で、教員には学生が実習をクリアできるための幅広い視点からの指導が求められる。本学では、学生が子ども・利用者との関係性をつくるきっかけづくりとなるように、自己紹介の教材を手作りで作製して実践しているが、この自己紹介を例に取ってみても、現場の保育者は必ずしも使用しているわけではない。すなわち、早く名前を覚えてもらうという側面だけでなく、学生の実習に取り組む意欲を高める手段としての意味合いも強く、モチベーションの維持・向上といった側面を併せ持っている。

他にも、養成校では、実習先の部分実習で手遊び、絵本、紙芝居、読み語りなどを行う際には指導案を課しており、子ども・利用者の状況を正確に見取り、成長・自立の願いを込めて指導案等を作製・実践し、その結果分析までを念頭に指導を行っている。

そのほか、実習記録においても、「現場の様々な要素が学生の学びになる」との立場から、各項目を決めて記載する記録形態を保育所実習と施設実習両方で採用している。まず、第一義的に、学生が子どもや利用者の姿を丁寧に記載していくことで、子どもの発達を捉えたり、利用者支援の在り方を整理することに活かしている。また、丁寧に記していくことは、自身の実践を振り返り、根拠に基づいた実践となるような精神的な安定としての役割を果たすものと考えられる。

このほかにも、実習準備には様々な側面があるが、これらの諸活動を通して自らを律して現場に向かわせることは、保育者として、先を見据えた指導にもつながる。

本ラウンドテーブルでは、実習の準備という点を焦点としながら、保育実習において学生が成長できるための取り組みについて参加者の方々と議論を深めることを目的とする。よって、保育分野に限らず、さまざまな研究者・現場の先生の忌憚のない意見を交換したい。

10月7日(日) 15:30~17:00

ワークショップ①

授業逐語記録にもとづく比較授業分析

— シンガポールの授業と比較して日本の授業の特徴をさぐる —

(204講義室)

企画者

柴田好章(名古屋大学)

提案者

久野弘幸(愛知教育大学)

サルカール アラニ・モハメッド レザ(帝京大学)

〈設定趣旨〉

本ワークショップでは、提案者らが協同して研究を進めている比較授業分析を行う。比較授業分析は、逐語記録にもとづく質的な授業分析の方法を用いて、異なる国の授業の共通性や差異から、互いに有益な知見を見いだすことをめざしている。昨年度にひきつづきワークショップでは、日本とシンガポールの中学校の理科の授業を対象として、比較授業分析を行う。昨年度はシンガポールの理科授業を中心に分析したが、今年はシンガポールの理科の授業と比較しながら、日本の授業の特徴を探る。

ワークショップでは、まず、提案者側から、分析対象授業の紹介、提案者らによる研究者の立場からの分析結果の報告、事前に開催した授業検討会における教師の立場からの分析結果の報告を行う。そして、ワークショップの参加者にも、日本とシンガポールの授業記録の一部を示した上で、実際に分析を行ってもらい、意見交換をする。これらによって、国を超えて、授業あるいは学習という事象における共通する知見や課題が明らかになると予想される。また、両国の教育の制度や文化背景を考慮しつつ比較文化論的に考察することによって、授業の有する文化的固有性についても明らかになると予想される。こうした成果に基づき、最後に参加者も交えてディスカッションを行い、今後の授業研究の国際化を展望したいと考えている。

日本教育方法学会刊行書籍

教育方法13.	いま授業で何が問われているか	1983	(2,472円)
教育方法14.	子どもの人間的自立と授業実践	1985	(2,940円)
教育方法16.	個性の開発と教師の力量	1987	(2,520円)
教育方法17.	教育方法を問い直す	1988	(3,045円)
教育方法18.	新教育課程と人間的感性の育成	1989	(2,039円)
教育方法19.	知育・徳育の構想と生活科の指導	1990	(1,794円)
教育方法20.	学校文化の創造と教育技術の課題	1991	(1,794円)
教育方法22.	いま、授業成立の原則を問う	1993	(1,896円)
教育方法23.	新しい学力観と教育実践	1994	(1,896円)
教育方法25.	戦後50年、いま学校を問い直す	1996	(1,998円)
教育方法26.	新しい学校像と教育改革	1997	(1,890円)
教育方法27.	新しい学校・学級づくりと授業改革	1998	(2,058円)
教育方法28.	教育課程・方法の改革 —新学習指導要領の教育方法学的検討—	1999	(1,953円) (価格は税込)

〒170-0005

東京都豊島区南大塚2-39-5

明治図書

TEL.(編)03-3946-3151・3152

TEL.(営)048-256-1175

『教育方法』は、大会当日、会場にて大会割引価格にて販売いたします。

この機会に多数の方々のご購入をお願いいたします。

『教育方法29』より、図書文化から出版されることになりました。

教育方法29.	総合的学習と教科の基礎・基本	2000	(1,890円)
教育方法30.	学力観の再検討と授業改革	2001	(1,890円)
教育方法31.	子ども参加の学校と授業改革	2002	(1,995円)
教育方法32.	新しい学びと知の創造	2003	(1,995円)
教育方法33.	確かな学力と指導法の探求	2004	(1,995円)
教育方法34.	現代的教育課程改革と授業論の探求	2005	(1,995円)
教育方法35.	学習意欲を高める授業 —どのような学力を形成するか—	2006	(2,100円)
教育方法36.	リテラシーと授業改善 —PISAを契機とした現代リテラシー教育の探究—	2007	(2,100円)
教育方法37.	現代カリキュラム研究と教育方法学 —新学習指導要領・PISA型学力を問う—	2008	(2,100円)
教育方法38.	言語の力を育てる教育方法	2009	(2,100円)
教育方法39.	子どもの生活現実にとりくむ教育方法	2010	(2,100円)
教育方法40.	デジタルメディア時代の教育方法	2011	(2,100円) (価格は税込)

最新刊・教育方法41.

東日本大震災からの復興と教育方法（仮）

〈内 容〉

- I 東日本大震災と教育方法学の課題
- II 防災・復興に取りくむ教育方法
- III 原発問題と教育方法
- IV 教育方法学の研究動向

〒112-0012

東京都文京区大塚1-4-5

図書文化

TEL. 03-3943-2516